

監査論



監査論担当
吉田 武史 講師

本試験を振り返って ～出題傾向・合格ライン等～

久野 続いて12月8日2限に、管理会計論と同時に120分間で行われた監査論です。企業法・管理会計論同様、監査論も形式の変更がありましたね。出題数は20問から16問に減少し、配点は6点問題が13問、7点問題が2問、8点問題が1問でした。特に監査論は4肢6択形式ともなっており、受験生の皆さんも戸惑われたのではないのでしょうか。

私は、データリサーチ解答枠「6」の件でしばらく茫然自失状態でした。とりあえず6番目の解答グループを作るという観点で応急措置は終わりましたけど。

吉田先生、先ほどは「ここ数年で一番易しかったです」ということでしたが、平成25年短答式試験と難易度比較するとどんな感じになるんでしょう。

吉田 難易度は、問題数が異なるので、割合で言っていきますと、昨年の平成25年第Ⅰ回短答式試験はAランクが50%、Bランクが30%、Cランクが20%で、平成25年第Ⅱ回短答式試験はAが55%、Bが35%、Cが10%であるのに対して、今回の平成26年第Ⅰ回短答式試験はAが68.75%、Bが25%、Cが6.25%ということで、どんどん易しくなっています。絞り込みができなくなったとは言え、迷う問題は少なく、私の解答時間も前々回が23分、前回は22分、今回は13分と、だいぶ短くなってきています(笑)。受験生の皆さんも、今までは解くのに40分ぐらいかかっていたのが、今回は30分ぐらいで済んだのではないのでしょうか。

久野 出題形式の変化はいかがですか。

吉田 出題形式は大幅に変化しましたね。前々回は5肢5択20問、前回は4肢5択20問で、うち表形式の比較問題が2問あったのに対して、今回は4肢6択16問と問題数が減少した一方で、絞り込みが完全にできなくなりました。表形式の問題が2問ありましたが、知っていれば、すぐに解ける問題でした。いやー、監査論だけマークシートも1から6までであるのは新しいですね。

久野 絞り込みとか消去法は4肢でも難しくなりますし、さらに6択にもなると、一つ一つの肢の正誤判定の緻密さが求められますよね。旧試験制度で短答式試験が導入されて以来、初めての6択だと思います。

出題数が減少して、出題分野には影響がありましたか。

吉田 出題分野については、比較の出題頻度の高い、「不正、継続企業の前提、金融商品取引法監査制度」が1問も出ず、「監査報告」も少なかった一方で、「監査の実施」からの出題が多かったですね。「監査の実施」の出題内容は、回によってバラバラですが、今回は全部易しい問題でした。

久野 6点問題、7点問題、8点問題があったわけですが、その違いの根拠らしきことは見えますか。

吉田 傾斜配点の趣旨は…特に感じません。配点の多い問題が難しいというわけでもないです。一応、問題3の「保証報告書の記載文言」、問題6の「一般基準」、問題16の「内部統制監査」は、いずれも分野的には重要性が高く、頻出の問題であるとも言えなくもないですが。問題3は手間賃ですかね(笑)。

久野 過去の短答式試験問題(過去問)と比較して気づく点がありますか。

吉田 2年連続、過去問との類似性を指摘しました。

で、今回ですが、16問中11問は、過去問とほぼ同じ内容の記述が含まれているか、出題形式が同じでした。記述については、形式が異なる問題3を除いた60個の記述のうち15個が過去問と類似していて、うち6個は過去3回以内の出題です。問題1のウの守秘義務の解除は、平成24年第Ⅱ回の問題8のエ(以下、「H24Ⅱ-8エ」と記述)。問題1のエの正当な理由は、H20-8エ。問題2のアの就職制限は、H23Ⅱ-4エ。問題2のイの社員の競業の禁止は、H24Ⅰ-3イ。問題

3の出題形式は、H23 I -15。問題4のウの期中減資は、H24 II -6イ。問題5のウの監査の基準の範囲は、H21-5ウ。問題7のイの四半期レビューに適用される基準は、H24 II -7ウ。問題8のウの共同監査は、H18-11エ。問題10のウの手続実施上の重要性は、H23 I -8ウ、H24 II -12ウ。問題12の出題形式は、H20-10。問題12のイの確認は、H20-10ウ、H23 I -9イ。問題12のエの網羅性の立証は、H23 II -13エ。問題15のアの意見に関する除外事項の記載内容は、H25 I -17イ。問題15のウの正当な理由によらない会計方針の変更は、H22 I -17エ。問題15のエの審査の完了時期は、H22 I -20ウ。問題16のアの経営者の評価方法の検証は、H25 I -18オといった感じでした。ほかにもありそうですが、取り急ぎここまでしておきます。

久野 理論科目については、テキスト等でのインプットが大前提になるわけですがけれども、過去の短答式試験問題で正誤判定を求められた記述も、短答答練での記述同様、反復練習の材料にしておきたいですね。

それでは、各問題のコメントをお願いします。

吉田 先に「短答答練」や「短答対策基本問題集」、「短答式直前対策演習」との対応関係を言っておきますと、形式が異なる問題3を除いた60個の記述のうち9個はキッチリと当てています。内容面ではトータルで32個ぐらい当てていますかね。

久野 監査論チームもよく試験問題を研究していただきました。ありがとうございます。きっと受験生さんも感謝の気持ちで一杯です、はい。各問題のコメントです。

吉田 問題1は「公認会計士監査」に関する問題です。ウの守秘義務の解除とエの正当な理由は短答対策基本問題集p.98のQ29、Q30に類似の問題がありますし、ウは短答直前答練第2回・問題7イで出題しているので、容易に正誤判断できるでしょう。残りのアの職業倫理に関する規定は一応、短答式全国公開模試・問題1アで出題していますし、イの独立性に関する確認書は、仮に電子的媒体が認められないのであれば、そのことを強調しているはずですので、そんなことはないだろうと判断して、無難に正解したいです。

問題2は「公認会計士法」に関する問題です。アの就職制限は短答直前答練第1回・問題2ウで、イの社員の競業の禁止は短答直前答練第3回・問題6イと短答対策基本問題集p.96のQ21で、エの監査法人の社員は短答直前答練第3回・問題6ウで出題しているので、多少細かいですが、正解したいです。

問題3は「保証報告書の記載文言」に関する問題です。過去に同じ出題形式の問題がありました。アの条文番号は短答直前答練第2回・問題4エで出題していますし、四半期レビューでは十分かつ適切な監査証拠という表現を用いないことに気づければ、正答を導けるでしょう。各保証業務の比較を押さえれば、短時間で解けるのではないのでしょうか。この問題も正解したいですね。

問題4は「会社法（会計監査人）監査」に関する問題です。会社法上の大会社の定義における最終事業年度の意味を押さえれば、ア～ウの正誤判断はできるでしょう。最終事業年度に係る貸借対照表とは、前回の定時株主総会で報告された貸借対照表、又は、会社成立日の貸借対照表のことをいいますので、アの期中増資で資本金が5億円以上になっても会計監査人の監査が必要となるのは翌事業年度からであり、ウの期中減資で資本金が5億円未満になっても会計監査人の監査が不要となるのは翌事業年度からとなります。エの機関構成は、公開会社なので問題ないですね。この問題は間違えてしまっても仕方がないでしょう。

問題5は「監査の基準」に関する問題です。アの監査基準の利害調整機能は短答直前答練第2回・問題3アで、ウの監査の基準の範囲は短答基礎答練第2回・問題5エと短答対策基本問題集p.90のQ6で出題しているので、容易に誤りと判断できるでしょう。イの監査の固有の限界は過去に類似の出題があったような…。この問題は確実に正解したいですね。

問題6は「監査基準の一般基準」に関する問題です。イのCPE制度は短答基礎答練第2回・問題8アで、エの守秘義務は短答基礎答練第1回・問題4ウで出題しているので、容易に正誤判断できるでしょう。アの一般基準の改訂がちょっと悩ましいかもしれませんが、監査基準の平成14年改訂前文三2に、そんなことが書いてありますね。ウの監査調書が提供する事項はテキストに書いてあるので、正解したいです。

問題7は「四半期レビュー」に関する問題です。アの報告書の見出しは短答基礎答練第1回・問題19アで、イの四半期レビューに適用される基準は短答基礎答練第2回・問題6オで出題しているので、容易に正誤判断できるでしょう。ウは、監査人の期中交代で、前任監査人の監査計画に従って四半期レビュー計画を策定する義務はないので、誤りと判断したいです。エは、四半期レビュー基準・実施基準6の会計記録に基づく作成が問われていると判断して、この問題は確実に正解したいです。

問題8は「監査に関する品質管理基準」に関する問題です。イの品質管理基準の設定の背景は短答基礎答練第2回・問題6アで、ウの共同監査は短答対策基本問題集p.70のQ21で出題しているので、容易に正誤判断できるでしょう。アがちょっと悩ましいかもしれませんが、品質管理の目的は、正しくは、状況に応じた適切な監査報告書の発行であることを思い出せば、適正意見を表明できるように品質を保つという記述に違和感を持たないではないでしょうか。エは、品質管理基準九4の監査事務所内外からもたらされる情報…の知識からでも正しいと判断できるでしょうか。この問題も正解したいですが、間違えてしまっても仕方がないでしょう。

問題9は「専門家の業務の利用」に関する問題です。アの専門家の客観性の評価は短答基礎答練第1回・問題15オで出題しているので、正しいと判断できるでしょう。エの監査意見に対する監査人の責任は典型論点なので、誤りと判断できなければいけません。残りのイとウですが、これらは根拠規定を読んでも、正誤判断できるのではないのでしょうか。イの企業に雇用されている専門家は、従業員であることに変わりはないですし、ウの監査人の利用する専門家が守秘義務不要だとすると、大変なことになっちゃいますし。よって、この問題は確実に正解したいです。

問題10は「監査上の重要性」に関する問題です。アの重要性の決定は短答式全国公開模試・問題15アと短答式直前対策演習Q29で、イの質的

重要性は短答基礎答練第1回・問題13アで、ウの手続実施上の重要性の定義は短答対策基本問題集p.36のQ51で出題しているので、容易に正誤判断できるでしょう。エは、手続実施上の重要性と監査手続の実施範囲との関係を理解していれば問題ないですね。したがって、この問題も確実に正解したいです。

問題11は「リスク評価手続」に関する問題です。アの内部統制の理解は短答基礎答練第1回・問題12イで、ウの監査チーム内の討議は短答直前答練第3回・問題12イで出題しているので、容易に誤りと判断できるでしょう。イの質問とエの内部監査の理解も無難に正しいと判断できますので、確実に正解したいです。

問題12は「監査要点と監査手続の適合性」に関する問題です。過去に同じ出題形式の問題がありました。アの期末日後の入金チェックは短答基礎答練第2回・問題9ウで、ウの棚卸資産の実査は短答基礎答練第2回・問題10アで、エの網羅性の立証、いわゆる遡及法と前進法は短答基礎答練第2回・問題9エで出題していますし、イの確認は典型論点なので、確実に正解したいです。

問題13は「会計上の見積りの監査」に関する問題です。イの特別な検討を必要とするリスクへの対応は短答直前答練第3回・問題12ウで、ウの経営者確認書は短答式直前対策演習Q52で出題しているので、容易に正しいと判断できるでしょう。アは期末日後、監査報告書日までに発生した事象が、会計上の見積りに関する監査証拠を提供するかどうかを判断するうえで、監査手続が追加されることはあるだろうということで誤りと判断できますし、エの仮定の合理性は、短答基礎



答練第2回・問題14オで、その重要性を強調していて、専門家が絡んでいるからといって、監査人が全く評価しなくて良いというのも違和感を覚えられますでしょうから、確実に正解したいです。

問題14は「**連結財務諸表の監査**」に関する問題です。アの重要性の基準値は短答式直前対策演習Q57で、イの構成単位の財務情報について実施する作業の種類の設定は短答直前答練第3回・問題16オ、短答式全国公開模試・問題12ウ、短答式直前対策演習Q58で出題しているので、容易に誤りと判断できるでしょう。ウの連結プロセスとエのグループ経営者とのコミュニケーションは若干細かいですが、アとイの誤り度合いが際立っているので、確実に正解したい問題ですね。

問題15は「**監査報告**」に関する問題です。ウの正当な理由によらない会計方針の変更は短答対策基本問題集p.56のQ24で、エの審査の完了時期は短答対策基本問題集p.68のQ19で出題していて、アの意見に関する除外事項の記載内容とイの意見不表明の記載内容は監査基準に毛が生えたぐらいの記述で、全記述とも典型論点なので、この問題も確実に正解しなければなりません。

問題16は「**内部統制監査**」に関する問題です。アの経営者の評価方法の検証は短答直前答練第3回・問題20イで、イの財務諸表監査との関係は短答対策基本問題集p.80のQ14で、エの開示すべき重要な不備がある場合の内部統制監査報告書の記載事項は短答直前答練第1回・問題20イで出題しているので、容易に正誤判断できるでしょう。ウの内部監査人の業務を利用する場合の、内部監査人の独立性・客観性については、財務諸表監査に限らず、内部統制監査でも検討が必要だろうと応用できれば、正しいと判断できますので、確実に正解したいですね。

久野 どうやら、形式が変わって戸惑いがあったとしても、問題に取り組めば比較的すんなりと正解に辿り着くことができるって感じなのかな。

短答式試験に合格するために、監査論で他者に遅れをとらないためには、どれくらいの得点水準が必要でしょうか。なんか、すごい数字が出てきそうで怖いんですけど。

吉田 振り返ってみると、今回は「短答基礎答練」で出題している基本的な論点が多く、また、過去問を中心とした「短答対策基本問題集」と類似の問題も多いので、易しいと言わざるを得ないですね。短答式試験合格者として確実に正解して欲しい問題は、難易度Aとしている**問題1、問題5、問題7、問題9、問題10、問題11、問題12、問題13、問題14、問題15、問題16**の11問で、これだけで68点になります。うち1問ぐらい間違えても大丈夫でしょう。また、難易度Bとしている**問題2、問題3、問題6、問題8**の4問のうち、問題8を除く3問は、正解して欲しいというか、正解しちゃうんじゃないでしょうか。これでプラス20点の88点。ただし、Aと同様に、Bの最初3問のうち1問ぐらい間違えても大丈夫ですし、初めての全問題6択で、絞り込みができないということもありますので、結果として最低でも75点前後は取りたいというところに落ち着くのではないのでしょうか。60点台では厳しく、他科目での挽回が必要となるでしょう。80点以上も続出なんじゃないかなー。それぐらい今回は珍しく簡単です。

久野 かなり高い得点比率になりますね。

次回以降の短答式試験を受験される予定の方にアドバイスのものはありますか。

吉田 今回易しかったので、今後、受講生さんの監査論の学習時間が減りすぎないか心配です。個人的にも、上級講義であんなにやったのに…という感じですから（泣）。ただし、監査論は、ここ数年は骨のある問題であることが多かったので、依然として油断は禁物です。次回、難易度が元に戻るかもしれませんし。あと、出題形式は固定ということはないでしょうが、2回連続4肢だったのも、今後も絞り込みに頼らずに、全肢可能な限り正誤判断できるようにしておいた方が良いでしょうね。

よく「監査論の勉強方法が…」と相談を受けますけど、短答に関しては、まずは学習時間をしっかり確保して、提供された教材である上級テキスト、＜付録＞、「短答対策基本問題集」、「短答式直前対策演習」、答練をこなすだけです（年度によって教材の一部は異なります）。そして、講義中に指摘された規定や、答練の解説に記載された規定については、可能な限り法令基準等を読んでおくこと。問題の記述のうち、6割近くが、法令基準等に記載されている規定からの出題になっていますからね。それだけで合格点は取れるはずですし、今回でしたら合格点を超えてお釣りがもらえるぐら

いです。したがって、あまり点数が取れなかった方は、もっと学習時間をかけて欲しいですし、よく分からないところについては、是非質問に来てください。

久野 ここ数回の短答式試験はより良い方向への「改善」が意図されているようなんですね。「監査論・管理会計論」の時間帯については、おそらくですが、時間不足・問題の取捨選択といった問題点を解決・改善する方向性があるんだと思います。短答式試験に先入観を持たないで、短答式試験・論文式試験に合格する知識の正確性と体系的な理解を自分のものにするオーソドックスな学習をしていただきたいですね。

吉田先生、ありがとうございました。

財務会計論



財務会計論-計算担当
新井 良明 講師

本試験を振り返って ～出題傾向・合格ライン等～

久野 最後に、12月8日第3限に行われた財務会計論です。財務会計論に限っては、出題は、例年通り、8点問題が18問、2つの総合問題の形式をとった4点問題が14問の合計32問でした。毎回の試験のこの座談会の冒頭の一言で先生方から「変化がなかった」という言葉が出てくるとは感じてですね。出題形式面で何か指摘すべきことはありますか。

新井 財務会計論-計算の過去の本試験では、全問解くには時間が厳しいというような回もありましたが、今回は時間内に解答できた方も多かったと思います。また、企業法・管理会計論・監査論と、問題数が変わったことを聞いて「財務会計論はどうなる？」と身構えていましたが、従来同様、計算問題は個別問題8問、総合問題2問（小問14問）でした。計算部分では大きな傾向の変化はないと言えますね。

久保 財務会計論-理論の出題形式ですが、新井先生と同じように、1限目の企業法や2限目の管理・監査の情報から、もしかしたら財務会計論も出題形式に大きな変更があるかも…。と構えてはいましたが、蓋を開けてみれば例年とは変化なしで、この点でまずは安心しました。具体的には、ア～エまでの4つの文章の正誤を判定し、組合せから解答を選ぶものと、1. ～ 5. までの5つの文章の正誤を判定し、1つの解答を選ぶものがありました。TACの答練では、いずれの形式も想定した上で出題していましたので、TACの答練を受けていた受験生の皆さんは違和感なく本試験問題を受け入れられたと思います。特に受験生の皆さんにとっては、出題形式の変更はそれだけで面を喰らってしまい実力を出せないこともありますので、変更がなかったことはやっぱり嬉しかったです。

久野 先ほど、新井先生からは「標準的な問題が多く、正確性が問われる良問」とありましたが、難易度的にはいかがでしたか。

新井 財務会計論-計算では、先ほども申し上げましたが、昨年度の試験に比べると、やや易化した印象です。分量が軽くなったからそう感じたかもしれません。即座に解答できる問題もありましたので、その分他の問題に時間を割くことができ、制限時間内にすべての問題に触れることができたと思います。

久保 財務会計論-理論の難易度についても、昨年度の試験から若干易化したように思われます。しかし、これは「短答式試験は、できるだけ幅広く、多くの基本的な問題を出題することにより、論文式試験に進む前に、公認会計士になろうとする者に必要な専門的知識が体系的に理解されているかどうかを客観的に判定するための試験」であるとする公認会計士・監査審査会の考え方に沿った適切な変更と考えられ、多くの受験生の皆さんにとって歓迎すべきものであったと思われます。

久野 出題内容的にはどうだったんでしょう。過去本試験問題と類似性が指摘できる問題もあったのかな。

新井 財務会計論-計算では、キャッシュ・フロー計算書の個別問題と企業結合の総合問題で、過去の本試験問題と類似する問題が出題されました。

久保 財務会計論-理論の出題内容ですが、これについても大きな変化がないと同時に、以前はたまにあった解答が割れてしまうような問題もありませんでした。この点でも安心しました。具体的な出題内容は、過去の本試験でも問われている典型的な問題から、近年の会計動向を踏まえた問題まで幅広く出題されていました。

久野 ありがとうございます。それでは、個々の問題についてコメントをお願いします。問題1、理論ですから久保先生からですね。

久保 問題1は「財務会計の機能と制度・財務会計の基礎概念」に関する問題です。まず、アの選択肢ですが、毎度おなじみの目くらましがありますので、これに気をつけましょう。具体的には「大恐慌を云々」の件ですが、ここは検討しなく

財務会計論



財務会計論-理論担当
久保 慎悟 講師

本試験を振り返って ～出題傾向・合格ライン等～

て大丈夫ですね。目くらましに惑わされなければ大丈夫だったと思います。イの選択肢は簡単ですよね、その他有価証券の時価評価差額を思い出せば大丈夫なはず。ウの選択肢は一旦飛ばして、エの選択肢から検討しましょう。エの選択肢で迷いやすいのは3文目ですね。「企業実体の公準という法的実体」という文言が少し迷いますが、連結財務諸表の範囲が法人格に合致しないことを思い出していただければ判断できたかと思います。最後にウの選択肢ですが、誤解をしないように強調しておきますとわが国の討議資料「財務会計の概念フレームワーク」は、討議資料として正規の手続き（デュープロセス）に則って公表されているものではありません。しかしながら、本問では、「会計基準の設定に必要な正規の手続き」としていますので、会計基準ではない「財務会計の概念フレームワーク」については、当該手続は経ていないと言えます。

以上のように、問題1は、若干迷う要素がありますので、選択肢の組合せを駆使して何とか正答に辿り着いて欲しかった問題です。難易度はBと考えます。

問題2は「財務会計の概念フレームワーク」に関する問題です。良問ですね。公認会計士試験を合格するものであれば知っていなければならない「財務会計の概念フレームワーク」の前提・立場についての理解を問うたものです。必ず正答しなければならない問題と言えるでしょう。難易度はAでしょう。

久野 次は、計算、新井先生ですね。問題順をお願いします。

新井 問題3は「払出単価の計算・貸倒見積高の算定」の問題です。払出単価の計算だけでも時間がかかると思いますが、それに加えて貸倒見積高の計算も問われているので、今回の個別問題の中では時間がかかる問題であったと言えます。ただし計算自体は基本的な内容ですので、手をつけた方は確実に正解していただきたいです。

久保 問題4は「棚卸資産の期末評価」に関する問題です。基本的な問題です。アとイの選択肢は、ともに正味売却価額の内容について問うた問題です。迷うところなく正誤の判断ができたと思います。ウとエの選択肢は、典型的な論点であり、TACの答練でもしっかりと対策をしていましたので大丈夫だったと思います。しっかりと正答して欲しい問題でした。難易度はAでしょう。

新井 問題5は「資産除去債務」の問題です。インフレ率補正後の将来キャッシュ・フローを計算する点について、講義などで詳しく取り扱っていない論点ですので、正答できなくても仕方がないと思います。

問題6は「有形固定資産」の問題です。計算は易しい内容ですが、処理の説明について正誤判断が問われていた問題です。3つの処理のうち、圧縮記帳は正誤判断に迷われた方が多かったと思います。

久保 問題7は「純資産－自己株式」に関する問題です。アとイの選択肢は、典型的な論点ですので、しっかりと正誤判断ができたはず。ウやエは、自己株式の論点というよりは、連結や企業結合といった組織再編に関する論点でしたが、そちらの方でもしっかりと対策をしていましたので、大丈夫だったと思います。難易度はAですね。

問題8は「財務諸表の表示」に関する問題です。株主資本等変動計算書、キャッシュ・フロー計算書、附属明細表と幅広く表示について問われていました。それぞれの内容は、基本的かつ重要な内容であり、TACでもしっかりと対策していた内容でしたので、大丈夫だったと思います。こちらも難易度はAです。

新井 問題9は「キャッシュ・フロー計算書」の問題です。営業活動によるキャッシュ・フローから、当期純利益の金額を逆算する問題でした。こちらは確実に正答していただきたい問題です。ちなみに、過去に類似した問題がありました。

問題10は「1株当たり情報」の問題です。短時間で解答できたと思います。また、短答答練でも類似した問題を出題し

ていますので、こちらは落とせない問題ですね。

久保 問題11は「金融商品会計」に関する問題です。ここでは少し細かい知識が問われていました。例えば、アの選択肢やエの選択肢がそうです。アの選択肢は、重箱の隅をつつくような問題ですが、答練で似たような出題をしていますので、TACの受講生は何とか判断できたと思います。エの選択肢は、細かい知識ですが、テキストでも取り扱っていますので頑張って欲しかったです。

でも、本問は、アやエの選択肢が分からなかったとしても、イとウの選択肢が、基本的であり、かつ、この2つの選択肢から正答に辿り着けますので、正答はして欲しかったです。そういう意味で、難易度はAとします。

問題12は「ストック・オプション」に関する問題です。これは難しい問題ですね。まず、アの選択肢ですが、ストック・オプションの会計基準が適用されない取引について、2つや3つぐらいいは心得ていても、問題文で示された6つすべてを押さえている人は少ないのではないのでしょうか。その点で、アの選択肢はまず判断が難しいです。次にイの選択肢ですが、従業員等から提供される追加的なサービスについてその価値を信頼性をもって測定することができないということは直感的には分かるかも知れませんが、「社内的には…」といわれると迷ってしまうと思います。結論からは、社内的に測定できても駄目なのですけど…。という意味でイの選択肢も少し迷う要素があると思います。続いてウの選択肢ですが、こちらは大丈夫だったと思います。しっかりと正誤を判断して欲しい選択肢です。最後にエの選択肢です。こちらも難しかったと思います。権利不行使による失効については、基本的には実績に基づいて会計処理を行うのですが、一定の場合には失効数が確定したものとみなすことができることになっています。とすると、エの選択肢は正しいのかと思いましたが、「一定の場合に該当するための必要な条件が揃っていないため、実は誤りです。これの正誤の判断を迫られるのは相当に厳しいか」と思います。

以上より、本問は、答えられなくても仕方のない問題と言えます。したがって、難易度はCでしょうね。

問題13は「リース取引」に関する問題です。こちらは基本的な問題であり、しっかりと正答していただきたいかったです。アやイの選択肢は、テキスト・答練で扱っていますので大丈夫でしょう。ウやエの選択肢は、テキストで取り扱っていませんし、計算編での知識があれば大丈夫だったと思います。ですので、こちらの難易度はAとします。

新井 問題14は「退職給付会計」の問題です。基本的な内容が問われている問題ですので、こちらも落とせない問題です。

久保 問題15は「連結会計・持分法会計」に関する問題です。最も適切なものを1つだけ選び出さなければならないという点で、他の問題よりは難易度が高めですが、4. の選択肢が明らかに正しいので、これで正答できます。1. や2. は基本的な論点ですのでしっかりと正誤の判断をして欲しかったです。3. と5. は迷いやすい内容ですが、4. と比べて相対的な正しさという尺度で検討していただければ良かったかと思います。少しテクニックが必要とは言えるでしょう。難易度はAよりのBといったところでしょうか。

問題16は「四半期財務諸表」に関する問題です。こちらも前問と同様に、誤っているものを1つだけ選び出さなければならないという点で、他の問題よりは難易度が高めです。ただし、こちらも1. の選択肢が明らかに誤りですので、すぐに正答に辿り着けます。4. と5. の選択肢は少し細かい内容ですが、2. や3. の選択肢は、基本的な内容ですのできちんと正誤の判断はついたかと思います。難易度はBよりのAといったところでしょうか。

新井 問題17は「研究開発とソフトウェア」の問題です。分量は多かったのですが、後回しにしても良い問題です。ソフトウェアの償却年数に迷われた方もいるかと思いますが、問題文にしたがって解答すれば、正解に辿り着けたと思います。

問題18は「固定資産の減損」の問題です。割引率のデータが複数与えられており、どの割引率を使用すれば良いのか悩んだ方も多いと思います。問題文の「見積値から乖離するリスクについては、当該将来キャッシュ・フローの金額に反映させているものとする」という部分から、使用する割引率は国債の利回りであると判断できれば解答できるのですが、講義などで詳しく取り扱っていない論点ですので、正答できなくても仕方がないと思います。

久野 次は総合問題の一問目ですね。

新井 問題19～問題25は「個別論点の総合問題」です。出題されている論点は「現金及び預金」、「商品売買の記帳方法」、「外貨換算会計」、「積立金方式の圧縮記帳」及び「税効果会計」の5つです。論点数はやや少ない印象ですし、

集計する項目が多いような配点箇所もなかったもので、中には満点を取る方もいらっしゃったのではないかと思います。問題19、問題21、問題22、問題24は平易な問題ですので確実に正解していただきたいです。問題20は必要な資料の取りこぼしがあれば取れる問題、問題23は商品売買の記帳方法を理解していれば取れる問題です。問題25は外貨建借入金に係る未払利息の換算に用いる為替相場について戸惑う方も多かったのではないのでしょうか。問題文に期中平均為替相場が与えられている事及び選択肢から判断できれば、正答できたと思います。

久野 総合問題の二問目です。

新井 問題26～問題32は「企業結合の総合問題」です。2012年と2013年の短答式試験の問題26～問題32では、2年とも「連結財務諸表」が中心となる問題が出題されています。一方、「企業結合・事業分離」が中心となる問題は2010年と2011年の短答式試験で出題されています。

本問の取引内容を整理すると、まず、共同支配企業の形成。その後、株式を追加取得したことにより子会社化。そして他の子会社との吸収合併という内容だったのですが、実はこの流れ、2011年の第I回短答式試験の総合問題と同じ流れでした。

また、取引内容を把握でき

ば、高得点も可能です。中でも確実に得点して欲しい問題としては、問題26、問題27、問題32の3箇所です。また、問題29、問題30、問題31は仕訳の穴埋め形式で問われていました。「あれ、利益剰余金の科目がない」と戸惑われた方もいらっしゃったと思いますが、問題30を得点できていれば合格圏内と思います。

問題29、問題30、問題31についてですが、[資料V]を見ると、合併仕訳でS社の株主資本をそのまま引き継ぐ方法により処理を行い、Y社の個別上、S社の利益剰余金100,000を計上していると判断できます。また、連結上の処理〈支配獲得後の利益剰余金の処理〉においても、S社の利益剰余金100,000を計上しています。すると、〈持分変動差額の処理〉の仕訳において利益剰余金100,000を消去するはずなのですが、問題文の仕訳には、借方に利益剰余金が記載されていませんでした。仕訳の貸借一致を確かめようとする、戸惑う可能性がある問題でした。

久野 ありがとうございます。さて、短答式試験合格者として、どの問題は正解して欲しい、ないしは、正解しておくべきでしょう。

新井 財務会計論-計算で確実に正解すべき問題としては、個別問題でAランクとした問題3、問題6、問題9、問題10、問題14、問題17の6問、総合問題でAランクとした問題19、問題20、問題21、問題22、問題23、問題24、問題26、問題27、問題28、問題31、問題32の11問中9問は得点したいところですね。合計すると84点になりますので計算部分の配点120点のうち、ちょうど7割という計算になります。今回は時間内にすべて解き終わった方も多いため、計算が得意であれば、もう1～2問上乗せしてアドバンテージを獲得できると思います。

久保 財務会計論-理論としては、問題2、問題4、問題7、問題8、問題11、問題13及び問題16は必ず正答して欲しい問題です。問題1及び問題15は、少し難しい要素がありますので、頑張ってどちらか片方ぐらいは正答して欲しいところです。問題12は取れなくても致し方ないと言えます。したがって、財務会計論の理論部分では、8問取って欲しいです・・・が、本試験の緊張を加味して7問は取ってくださいという感じです。個人的な感覚でのボーダーは、6問～7問か



なと思います。

久野 少なくとも計算で84点、理論で56点は確保しておきたい、合計140点・70%ですか。計算が得意な方はアドバンテージ確保が容易そうですね。

受験生の皆さんに何かコメントはありますか。

新井 論文式試験を視野に入れて学習される方も、第Ⅱ回の短答式試験を視野に入れて学習される方も、ご自身の本試験答案で間違えた箇所をもう一度見直していただきたいです。今回の試験は「取れるところを確実に得点する力」が可否を左右する良問であったと言えます。こういう問題で間違えたところって「取ろうと思えば得点できた」と自分に言い聞かせて見て見ぬフリをする人が多いですね。でも、何も反省できずに次に挑もうとするとまた同じミスをしてしまう…。謙虚に自分のミスに向き合った方が次回の試験に生きてくると思います。

久野 その話、個別成績相談でも感じる人が多いんですよね。次に間違えないためには自分に何を付け加えれば良いのかをほとんど考えてないというか、ミスという言葉で自分をごまかすというか…。ごめんなさい。

久保先生、受験生の皆さんへメッセージをどうぞ。

久保 この座談会の内容を見ている人はもう実感として感じているかと思いますが、公認会計士試験は今はチャンスです！！受験者数は、最盛期の3分の1近くまで減っています（予備校業としては哀しいことですが（泣））。受験者数が減っているということは合格しやすいということを意味しているはずですよ。さらに、平成25年の論文式試験合格者は、会計人材の需給が大幅に改善し、大手の監査法人から引く手あまたです。

今回の短答式試験である程度の手応えを感じている人は、ボーダー談義などせず、全力で論文式試験の勉強に邁進してください！これから短答式試験を受けようとする人は、次の短答式で必ず合格するべく年末年始を返上して、さらに勉強量を増やしてください！最後に、これから公認会計士試験の勉強を始めようと考えている人へ、若干情報が巷に流れ出していますが公認会計士試験は今は本当にチャンスです！！公認会計士試験は、現在、受かりやすいのに、得られるリターンが大きい試験となっています。こういったアブノーマルリターンが得られる状況はそう長くは続かないかも知れません。今のうちに、イヤ今こそ、公認会計士試験を目指して勉強を始めることをおすすめします。

久野 新井先生、久保先生。ありがとうございました。

本試験をふりかえる



司会
久野 元靖 講師

最後に

久野 さて、改めて、受験生の皆さんが気にされる平成26年第I回短答式試験の予想合格ラインを検討してみましょう。

座談会冒頭にも述べましたが、公認会計士・監査審査会は、短答式試験の合格基準は、「試験実施規則」により「総点数の70%を基準として、公認会計士・監査審査会が相当と認めた得点比率となり、1科目につき、その満点の40%に満たないもののある者は、不合格となることがある。」としています。

論文式試験合格者が平成23年1,511人、平成24年1,347人、平成25年1,178人と漸次減少していく中で、短答式試験合格者も、平成23年年間2,231名、平成24年年間1,274名として減少してきましたが、平成25年年間短答式試験合格者数は1,776名と増加に転じました。この増加は、おそらくは論文式試験受験者数を意識したことによるものと考えています。公認会計士・監査審査会がどのように考えているかは当然不明ですが、平成26年短答式試験でも平成25年試験と同程度の短答式試験合格者数が輩出されるのではないのでしょうか。願書提出者数が減少していますので、合格率が高くなってしまうことが合格者数に対する抑制要因になる場合もあるかもしれませんけれど。

さて、予想合格ライン、どうしますかね。ここでは、データリサーチ等の受験生の皆さんの得点状況を見ることはできませんので、まず、短答式試験合格者として確保して欲しい点数を、各科目レベルで考えてみましょうか。

新井 財務会計論-計算では、計算部分の配点120点のうち、ちょうど7割の84点になります。今回は時間内にすべて解き終わった方も多いと思いますので、計算が得意であれば、もう1〜2問上乘せしてアドバンテージを獲得できると思います。

久保 財務会計論-理論は、8問取って欲しいですが…が、本試験の緊張を加味して7問は取ってくださいという感じです。個人的な感覚でのボーダーは、6問〜7問かなと思います。

武田 管理会計論は、78点ですが、試験の緊張感やケアレスミス等あるでしょうし、75点を確保できていれば十分ではないのでしょうか。

吉田 監査論でも、最低でも75点前後は取りたいというところに落ち着くのではないのでしょうか。60点台では厳しく、他科目での挽回が必要となるでしょう。

田崎 企業法は、講師間の話し合いでは、今回の合格ラインは問数的には12問前後で、点数的には67点程度ではないかということでした。

久野 いつになく高い得点ですね。最低線で考えていくと $84+56+75+75+67=357$ (71.4%)ですか。ここまでの、そして、ここからの推定は受験者の皆さんの協力による「データリサーチ」の結果を見ずに行っています。したがって、その内容次第では、TACの予想合格ラインは修正されるかもしれません。また、合格得点比率・合格者数は、公認会計士・監査審査会によって決定されます。また、おそらくは、いくつかの問題で受験指導校の解答例が分かれることがあるかもしれません。過去には、受験指導校間で一致していた解答例が誤っていることになった場合もありますし、1つの問題について正解が2つあるとされたこともありますし、全員正解とされたこともあります。

議論の前提はやはり合格者数の予測になるんでしょうね。論文式試験合格者数がどう動くのか？論文式試験合格得点比率はどの水準になるのか？論文式試験受験者数がどの水準になるのか？新たに論文式試験に進む短答式試験年間合格者数はどの水準になるのか？第I回短答式試験合格者数は何人と推測されるのか？昨年の第I回短答式試験合格者数の1,000人前後を前提とするのが無難かもしれませんが、願書提出者数がさらに減っていますから、同程度の合格者数だと合格率が「えっ」てな感じになりそうですし。公認会計士・監査審査会は合格率はあまり気にされていないかもしれませんが。

さて、順番に・・・

(中略。この部分、議論が長くなりますし、諸般の事情もございますのでご容赦ください。)

久野 それでは、先生方、よろしいでしょうか。

12月8日現在、「データリサーチ」の情報がまったくない状況で、問題の質的側面からのみ考慮した予想合格ラインとして、

公認会計士・監査審査会が基準とする

総点数の70%前後、

70%～73%程度になる可能性が高いと思われます。

とします。

正直な話、合格者数次第ではないでしょうか。例年と比較し、問題難易度が大きく変化し、また、得点分布もある階層に集中する可能性があります。

ここで話した予想合格ラインは、TACの最終予想合格ラインではありません。この「本試験特別座談会」の公表予定時間は「データリサーチ確定集計結果」公表予定時間は同時となっており、本座談会で最終予想合格ラインにコメントすることはできません。これ以降の「予想合格ライン」に関する詳細については、必ず、「データリサーチ確定集計結果」を参照してください。

久野 今回の短答式試験にはかなり衝撃を感じました。「出題数の変更・配点の変更・4肢6択」。私見ですが、公認会計士・監査審査会は公認会計士試験の望ましい姿への「改善」を継続的に行っているんだと思います。「改善のための形式変化」って考えないとつじつまが合わないというか。

短答式試験の合格得点比率が5%刻みでないことについては企業法のみで受験する会計大学院修了者にとっては、問題の難易度を考慮に入れなければ、不公平感が漂います。問題の難易度については、前回の平成25年第Ⅱ回短答式試験以降じわじわ難化している印象を持っています。今回の平成26年第Ⅰ回短答式試験で出題数・配点を調整することによって不公平感を和らげようとしたのではないのでしょうか。

監査論・管理会計論の時間帯については、時間不足を感じる受験生の皆さんが圧倒的に多いですね。その結果、管理会計論の計算部分について、おそらくは試験としては本質的ではない「問題の取捨選択」という状況が発生しています。前回の平成25年第Ⅱ回短答式試験で監査論・管理会計論の理論について正誤判定をする記述が「5肢」から「4肢」に変わりました。ただその状況では時間不足状況が大きく改善されたわけではありません。で、さらに、今回の平成26年第Ⅰ回短答式試験で出題数を減らすことによって時間不足状況の改善を図ったのではないのでしょうか。その上で、監査論についてはより精度の高い理解・知識を担保するために4肢すべてについての正確な判断を求める「4肢6択」にし、管理会計論については安易な「問題の取捨選択」をさせないために「計算」に高めの配点をしたのではないのでしょうか。

さて、公認会計士試験に合格するために、1月～3月ってとても大切な時期です。最終目標は論文式試験合格であることを見据えて、学習スケジュールを考えてくださいね。これからは「論文式試験合格を目標とした体系的理解を深める学習」ないし「短答式試験合格に必要な正確な知識および短答式試験合格を後押しし論文式試験合格を目標とした体系的理解を深める学習」の時期です。4月8日からスタートする第1回論文式全国公開模試を一つの目標として学習を進め

ていってください。第1回論文式全国公開模試までに積み残しのない状態にしておけば、4月以降ないしは6月以降の効果的学習が可能になります。そのために、通常の論文基礎答練、論文応用答練の出題範囲指定に合わせて、毎回、仕上げた状態でいけば、自動的に第1回論文式全国公開模試までに3回転はできるなんてことも考えられます。与えられるカリキュラムは利用しない手はない。そうそう、論文答練に追われて理論中心の学習になる方もいらっしゃるね。計算力の維持を忘れないように。計算力に不安がある方は論文答練が本格化する前に計算力を高めてください。

短答式試験を5月に受験する場合、短答式試験対策に偏る、とか、論文式試験対策に偏るとかは禁物です。短答式試験対策と論文式試験対策って同時進行できます。短答式試験に気持ち良く合格するためには「正確な知識」と「体系的な理解」が両方とも必要です。理解を高めながら正確性もつける。バランス良く学習してください。車の両輪ですから、回らないと動かないし、どちらかかが強いと曲がってしまう。

「何度受けても少し足りないんです。」なんて言葉も耳にします。「講師学習相談」とか「個別成績相談」とかで、学習方法をすぐに修正できる方もいらっしゃるようですね。「少し足りない」の原因をきちんと考えないと同じことの繰り返しになるかもしれません。計算なのか理論なのか、「皆が取れるところを落とさない」って意味を誤解していないか、体系的な理解ができていないのに知識の詰め込みに走っていないか、体系的な理解を重視しすぎて正確な知識が曖昧になっていないか、答練の点数だけを気にしていないか、答練の復習をしていて「知らなかった」ことを「知った」状態にしたから大丈夫なんて思っていないか…、いろんな原因があります。次には間違えないために自分に何が足りなかったのか。「後少し」が何かは考えなきゃいけない。「講師学習相談」とか「個別成績相談」とかで、お手伝いしかできないんですが、少なくとも、ヒントぐらいは見つかります。

ご自身のインプットのメインとなる教材、テキストにせよレジュメにせよ、それを大切にしてください。基礎力の確認をしながら、丹念にインプットを行ってくださいね。「理解すべきは理解し」「暗記すべきは暗記し」「正確にすべきは正確に」を心掛けてください。そして普段からアウトプットの要素を学習に取り入れてください。

さて、お集まりいただきました先生方、ありがとうございました。これから、解答解説原稿執筆が待っていますね。頑張ってください。

そして、平成26年第Ⅰ回短答式試験を受験生の皆さん、お疲れ様でした。まだ、次の本試験に向けて努力の日々を続けてください。短答式試験にせよ論文式試験にせよ、厳しい試験になるかもしれませんが、今、この環境で、合格後の話ですが、合格すると皆さんの希望が叶います。頑張っていきましょう。2014年が良い年になりますように。